

高浜市において、これからの時代にふさわしい「図書館のあり方」(役割・必要な機能)について、『これからの図書館のカタチ・チカラ』と題して、『広報たかはま』などをとおして市民の皆さんとともに考えていきます。

市では2月に総務省の「地域情報化アドバイザー派遣制度」を活用して、全国の図書館事情に詳しい浅野隆夫さん(※1)からリモート支援にて、これからの図書館のカタチについてのアイデアやヒントをいただきました。

今号ではその支援内容の一部を紹介しながら、高浜市の今後の図書館のカタチを考えます。

# これからの 図書館の カタチカラ

第5回

## 他市の事例から考える 高浜市の図書館のカタチ

### 選書は「選択と集中」

現代は図書館にかぎらず書店やインターネットなどで、さまざまな本や情報が入手できる時代にあります。図書館も「あれも、これも」といった総花的な品ぞろえで、蔵書をそろえても、利用者自身が必要な本や情報にたどりつくには時間や手間がかかりますよね。

必要とする情報がいつでもすぐ手に入り、暮らしや生き方をサポートできるよう、どんな人が本棚の前に立つのかを想像しながら、1冊1冊の本を司書が大切に選んで配架したセレクトショップのような図書館も求められてくると思います。

### 司書のチカラで本を届ける

札幌市図書・情報館では、司書に配架や本棚を作ってもらうにあたり、「人によるこんでもらえる本棚を作ってください」とお願いしています。例えばマネジメントといったようにごっこくりしたものではなく、

(※1)  
総務省の  
地域情報化アドバイザー  
**浅野 隆夫さん**  
札幌市中央図書館  
利用サービス課長

経歴  
平成23年に図書館へ異動。  
図書館システムの全面リニューアルと同時に「札幌市電子図書館」の立ち上げを経て、札幌市図書・情報館のコンセプトづくりに着手し、開館と同時に館長に着任した。  
平成28年に司書資格を取得。

「人前で話す準備」「上司の苦悩」といったより具体的なテーマで本棚づくりを行い、利用者への本の届け方・見せ方の工夫を常に意識しています。その甲斐もあって蔵書4万冊であっても年間100万人の利用があり、選択と集中といった運営で市民ニーズに応えることができています。



▲札幌市図書・情報館の本棚のようす

### 今後の図書館のカタチは？

全国の図書館の流れとして、今後は建物や設備、蔵書の数で人を引き付けることや、単一機能で本を借りるだけの場所という「図書館(やかた)」は難しくなっていくと思います。

図書館を何かをやるうと思って情報を得に行く、行けばアイデアや欲しい回答が得られる場、また本からさまざまな活動へと広がっていく「人と情報」「人と人」をつなぐ複合的な『コミュニティ施設』のような場ととらえ、今後のカタチを検討していくといいのではないのでしょうか。

## 札幌市図書・情報館



平成30年に『はたらくをらくにする。』をコンセプトに札幌市民交流プラザ内に課題解決型図書館としてオープン。常に最新情報の提供を目指し、蔵書の貸出機能を廃止し、働く世代をメインターゲットとし、テーマを絞って資料・情報提供を展開している。

「おしごとから、わたくしごとまで」仕事や暮らしのヒントが見つけれられるように「Work(仕事に役立つ)」「Life(暮らしを助ける)」「Art(芸術に触れる)」の3分野に特化し、小説や児童書コーナーの設置は行っていない。年間約100万人の利用がある。

- ◆図書館での催しに関しては17ページに記載がある「図書館情報」や図書館公式ホームページ・フェイスブック・ツイッターを確認してください。
- ◆今後も図書館の取り組みなどについては『広報たかはま』でお知らせします。



▲ホームページ ▲フェイスブック ▲ツイッター

問合せ先 [いきいき文化スポーツグループ](#) ☎ 52-1111(内線331)